

キャサリン・ヒュームの回想録より

Kathyrin Hulme, Undiscovered Country, Chapter 5 抜粋

キャサリン・ヒュームはアメリカに生まれ、工場労働者として働きながら作家を志望する。彼女は、農家の娘として育ったのちに帽子デザイナーとして大成功し、大金持ちになった女友達のウェンディ(アリス・ローラー)とヨーロッパに渡り、大型のスポーツカーを駆ってアフリカへと冒険の旅にでかける。それからパリに戻り、車を売る相手を探すうち、1924年にアメリカでグルジェフに出会ったのちにグルジェフのもとで学ぶことを求めてパリに住居と仕事を移していた女流作家・雑誌編集者のジェイン・ヒープとソリタ・ソラノに出会う。自分へのフォーカスを取り戻すためのグルジェフ由来のエクササイズを学んだことが鍵となり、キャサリン・ヒュームは、作家としての念願のデビューを果たす。代表作『尼僧物語』(邦訳絶版)は、のちにオードリー・ヘップバーンの主演で映画化された。

こうして実際に出会う前から恩人となったグルジェフからじかに学びたいとキャサリンは思うが、1924年の自動車事故と学院の閉鎖ののち、グルジェフはだれを教えることも拒み、かつての生徒たちはみな、グルジェフとの接触をあきらめていた。グルジェフは、パリのオペラ座前にあるカフェ・ド・ラ・ペを頻繁に訪れ、そこで執筆に打ち込んだ。キャサリンは、果敢なストーキングを試みるため、ウェンディとともに、人目をひくスポーツカーでカフェ・ド・ラ・ペに乗り付けた。

私たちふたりは彼のテーブルの前に立ち、彼が執筆中の原稿から目を離し、上を見るのを待った。彼はほんのしばらく私たちを待たせ、それは私たちには永遠にも感じられた。ようやく彼は頭を上げ、私がかつて見たことのあるうちでもっとも美しい目をもって私を見た。ほんの少しだけ怒っているみたいで、かすかに表情を渋くしていた。

「エクスキュゼ・モワ、ムッシュー。エテ・ヴァー・ムッシュー・グルジェフ？」[グルジェフさんですか？]

私の声は震えていた。あわてながら、私は自分たちが、ジェイン・ヒープが毎週モンパルナスで開いている彼の教えを学ぶための小さな集まりのメンバーであることを説明した。私の声はだんだん小さくなっていった。

まるでとても小さなものをよく見ようとしているみたいに彼の目は細くなり、そして私の後ろに立っていたウェンディへと視線は向かった。

「ギーブ？」と彼はつぶやいた。「ミス・ギーブ？」

一瞬のとまどいの後、「ヒープ」と言っているのだとわかった。ロシア語では明瞭に発音されないHの音を堅いGの音に置き換えていた。

「ウィ、ムッシュー・グルジェフ」と私は答えたが、私はもう虫の息だった。

「座りなさい」と彼は英語で言った。彼は自分のオーバーコートを脇によけて、ウエンディはベンチ席で彼のとなりに座れるようにし、私には空いている椅子をテーブルに引き寄せるように指示した後、コーヒーでも飲もうか、好きなものを注文してよろしいと私たちに言った。

ウエンディがほとんどのおしゃべりをした。私たちがどんな偶然のきっかけでジーン・ヒープのサークルに加わるようになったか、どんなふうにしてやがてノートまで取るようになったか(私のノートを写していたのだが)、そして教えの源を知りたいという気持ちからどれほど彼に会いたかったかを彼女は話した。自分はビジネスウーマンなのだと彼女は言った。これで自分についてすべて説明できたと言わんばかりに。彼女は両手の豊かなゼスチャーをもって、この予想外の出会いを自分がどんなに喜んでいるかを伝えた。

あたかも大事なことを告白するような彼女のおしゃべりを彼はよく観察していた。彼女のまくしたてるような早口の英語を彼は一語たりとも理解できただろう。彼はロシア産の長いタバコを一本彼女に差し出し、自分用にも一本、ホルダーに差した。たぶんブライア製のホルダーで、黒く短く、ふしくれだっていた。私は火を差し出し、彼は私のほうに視線を移すことなく、それでタバコに火を点け、次のように言った。

「ビジネスか。わしも同じくビジネスマンである」

いま思うに、私たちは、何時間もの執筆に彼がそろそろ疲れてきた絶好のタイミングに彼を捕まえたのだった。執筆に使う帳面がテーブルの上に載っていて、彼はその上に褐色の指を置いていた。音楽家が持ち歩く楽譜みたいで、角がとれて丸くなっていた。

のちに彼が使うのをよく聞いた言葉にするなら、「イディオット・リリーフ」[バカ休み]しなくなったちょうどそのとき、私たち見知らぬふたりが呼ばれもしないのにやってきた。文筆をもって何かを伝えるというたいへんな仕事に就いている人はみな、この「バカ休み」というのはなんと便利な表現かと思うだろう。

ウエンディは遠慮なくおしゃべりをしまくり、それでいて彼の言うことに耳を傾け、簡略化された彼の英語を理解しているように見えた。私はそれに感心した。彼の英語は、一部の人が言うような舌足らずの英語ではなかったが、冠詞を付けずに名詞を使ったり、助動詞を付けずに動詞を使ったりした。

「君たちは車を持っているのか？」と尋ねられ、彼女は窓ごしに下の舗道を指差し、泥はねで汚れた彼のセダンの真後ろに停めておいたパッカードを見せた。

車長があるのに車高が低い私たちのロードスターを見つめた後、彼はまっすぐに私を見て、「君が運転するのか」と聞いた。

私もウエンディみたいに快活かつ自然に話そうとしたが、彼の目があまりに強い力を放っていたので、私は答えようとしてどもってしまった。

「今日の午後、いっしょにフォンテーヌブローまで来ないかって言ってるの」と、テーブルの向かいに座ったウエンディが私に言った。「彼の車についてこいて」

グルジエフは一瞬だけ私から視線を外し、この誘いに大喜びのウエンディを眺めた。私はしっかりと声が出せるように用意を整え、かろうじて彼からの二番目の質問に答えられた。

「君はついてこれるかな？」

「イエス、サー」 私は彼の目をまっすぐに見て答えた。「ついていくのは得意です」

それなら午後三時きっかりに寝袋を車に積んでカフェに戻ってきなさいと彼は言った。

「スィンワン[Thin One]も連れてきなさい」とグルジエフは付け加えた。スィンワンというのはウエンディのことで、彼はこの名前をもって、彼が彼女から受けた印象を総括したのだった。

私とウエンディは立ち上がり、コーヒーのお礼を言って、晚餐室を後にした。王様との謁見の後に外に出るみたいだった。回転扉のところで私は振り返った。この出会いが現実起こったことなのだと確かめるために、もう一度グルジエフに目をやらずにはいられなかった。彼は東洋風に片足を折り曲げてベンチ席に座り、それを遠くから見ると、肩幅の広い仏像のようで、あまりに強い力を放っていたので、彼と私の間の空間にいる人たちはみな死んでいるのと同然のように見えた。

* * *

[サンジェルマンの投宿先のそばにある]カフェ・ド・フロールで軽いランチをとった後、私たちふたりはサンジェルマン大通りを下り、オペラ座前のカフェ・ド・ラ・ペに戻った。黒いセダンは先ほどとは別の場所に停めてあった。少しの間だけなので、ほんとうは進入禁止のタクシー乗り場に車を止め、カフェに入った。約束の三時きっかりに参上。

私が前に立つとグルジエフは「あはあ」と言い、カラクル帽をかぶると、オーバーコートとブリーフケースを取り、私を先導してカフェから出た。

彼は自分の車のエンジンをかけてアクセルをふかした。エンジンはげっぶするかのようになり、排気筒から黒い煙を吐き出した。私は自分たちの車をすぐに発進させ、ぴったりと後ろについた。これから三十八マイル、一台の車も間に割り込ませるものか。私は自分のすべてをこれに集中させ、体に電気が走るのを感じた。それでも私はパリの市街を抜けるまでに、十二回ぐらい彼の車を見失った。

彼はワイルドに車を走らせた。合図なしに割り込んだり追い越したり。ときにはほとんど隙間のないところに割り込み、間一髪のところまで難を逃れていた。道には彼の車とそっくりのフランス製のセダンがうようよいいた。私はそのうちいちばん乱暴な走り方をしている車を彼の車と見定めて、ハンドルを握り締め、追いかけていった。赤信号で一息つきながら、何度か彼の姿を捉えた。しゃれた角度で頭に帽子を載せ、平和きわまりない風情でタバコをふかしている。先頭から二台目か三台目のときにも青信号で真っ先に飛び出すのは彼の車だった。

パリの市外に出てから、彼を追うのは少しだけ楽になったが、それはほんの少しだけだった。国道上では一度にもっと長いこと彼を視界に留めることができた。だが、彼がバスやトラックを追い越すときの大胆さは、私をぞっとさせた。二車線しかない狭い道を走りながら、彼が大きくハンドルを切ってトラックを追い越し、逆方向からの車を激突寸前にかわすのを見るたびに、私は息をのんだ。

全行程の半ばごろだったかその後だったか(村の名前も道路標識も覚えていない)、私が全注意を釘付けにして追っていた黒いセダンはスピードを落とした。まもなく黒いセダンは、でこぼこ道に入っていく、何本かの木が茂っている下で停まった。グルジェフが車から出てきて、後ろに停めたパッカーのところに来た。彼はチャーミングにほほえむと、私たちに言った。

「ここで休憩する。グルゴイルを聴くんだ」

えーとグルゴイルというのは……カエルよ！ 私はどもりながらウエンディに言った。私たちふたりも車から出て、耳をすませた。木々の向こう、沼地の奥で、カエルが鳴いていた。何百ものカエルたちが、中音・低音・高音を合わせたすばらしい合唱をしていた。

グルジェフがタバコを吸うのを見ながら、私も震える手で自分のタバコに火を点けた。ライターの炎ごしに、私は彼を観察した。

彼は指を一本立て、音が聞こえてくる方向に頭をかしげ、人を虜にするような笑顔を浮かべ、「君たちにも聴こえているかな？」と言った。まるでカエルたちは彼がこの魔術的な日没の時刻にここを訪れるのを知っていて、彼ひとりのために歌っているかのように。

しばらくして、私たちはそれぞれの車に戻り、フォンテーヌブローに向かった。市街の混雑した交差点をグルジェフはゆっくり抜けた。彼がバックミラーで私たちの車がついてくるのを確認しているのを見て、私は安心した。この最後のマイルで置いてきぼりにはしたくなかったのだろう。彼の車を追って鉄道線路を越え、坂を下り、アヴォンの村に入った。とても古そうな教会のある小さな村だった。こぎれいな鑄鉄製の門の前でセダンは停まり、クラクションを鳴らした。

* * *

[一九六二年にプリオレを再訪したキャサリンはその夜のことを思い出す。]

そこはいまキャサリン・マンスフィールドが最後の日々を過ごした場所として知られていて、観光客はそのためにここを見に来るのだと運転手は言った。

私は門前にたたずみ、三十年前を思い出していた。このシャトーに暮らしていたもうひとりの著名人のこと、私がそこで過ごした一夜のことを。後から思い出すと、それは夢のようだった。奇妙で謎めいた夢であり、それはあたかも幽霊屋敷の一夜のようだった。

ウエンディと私がそこで一夜を過ごしたとき、シャトーは幽霊屋敷のようだった。だからこそグルジェフは私たちを招いたのだろうか。かつては神聖舞踏を練習する生徒たちの活気があふれていたスタディハウスのぞっとするような静けさを、私たちふたりの人間の気配によってまぎらわせるため？

私はスタディハウスがいまなお建物の反対側の木立のきわにたたずんでいるのかどうか見れなかったが、それでも私はあの夜、ペルシャじゅうたんが敷き詰められたスタディハウスに招き入れられたとき、ウエンディが手を叩いて、「なんて美しいんでしょう、ミスター・グルジェフ」と叫んだのを、きのうのこのように思い出した。スタンドグラス、東洋風の寝椅子、そして舞台の前の噴水……。千夜一夜物語

の世界だった。色の付いた光がかすかに射している闇のなか、グルジェフは不思議な表情を浮かべてウェンディを見ると、「君も感じるのか？」と言った。

舞台的な装飾にもかかわらず、そこには神聖な空気が漂っていて、それは最初の驚きの後しばらくしてから、強く感じられた。じゅうたんの敷かれた寝椅子に座り、私たちを招いてくれた主人とともに、どれだけの時間を沈黙のうちに過ごしたか、私は覚えていない。彼が何を話してくれたのかも覚えていないが、彼が口にしたなんらかのことから、ダルヴィツシュの祈りの舞踏でゆっくりと旋回する白い衣装をまとった踊り手たちの姿が目に浮かんだ。

彼が過去の光景を私たちに語っているのか、それとも自分が満足できる教えの一時期のことを自分のために思い起こしているのかもわからなかった。私はこの不思議な体験に圧倒されるあまり、スタディハウスの扉に刻まれた言葉に気づけなかった。スタディハウスの建築に関与したメンバーのひとりが、のちにその言葉を教えてくれた。

「ただ自分を相手に闘うことを求めてここに来たのだということを忘れず、だれであれ、あなたのなかにこの闘いを引き起こす者に感謝しなさい」

翌日、私たちはシャトーの玄関のランプの下で彼と別れ、謎を秘めた特別な待遇に対する感謝の気持ちをせいいっぱい伝えようとした。

ところが、彼は私たちの型にはまったお礼の言葉を聞くと、手を左右に動かし、感謝すべきなのは自分のほうだと言ったうえ、ユーモアと鋭さの両方を帯びた意外な言葉を口にした。

「つきあってくれてありがとう」

こう言うと、彼は方向転換し、後ろで手を組み、ややよろめくような足取りで、庭を抜けて引き返して行った。私にはどれだけワークを重ねても予期も抑制もできない感情のほとばしりをもって、彼は世界でいちばん孤独な人みたいだと思った。